

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520486

研究課題名(和文) アルメニア語新約聖書における談話戦略の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of the Discourse Strategy in the Armenian New Testament

研究代表者

千種 眞一 (CHIGUSA, Shinichi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：30125611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では談話分析の最良の資料である新約聖書「書簡」を対象に、古典アルメニア語新約聖書と新約聖書ギリシア語本文との比較分析により、談話レベルでの対応関係を同定した。談話構造を構成する主要範疇である談話境界、卓立、結束性の観点から、古典アルメニア語新約聖書に特徴的な談話戦略を解明した。また、現代アルメニア語テキストと比較した結果、現代語の談話戦略が古典期とは異質な性格を帯びていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to analyze the discourse strategies in the Classical Armenian New Testament, with special reference to the epistles, which are considered to be the most valuable texts for discourse analysis of the New Testament, and to identify the correspondences on the discourse level between the Old Armenian and Greek NTs. Some properties of the discourse strategies peculiar to the Armenian NT were clarified especially in terms of three universal categories of discourse boundaries, prominence and cohesion, which make up discourse structures of any language. Furthermore, based on the comparison with the modern Armenian texts of the NT, this study also demonstrated diachronically that the nature of discourse strategies in NT modern Armenian texts is different from that of Classical Armenian.

研究分野：言語学

キーワード：アルメニア語 ギリシア語 新約聖書 書簡 談話戦略 異訳

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 言語学における近年の談話分析の発展に伴い、伝統的な新約ギリシア語聖書研究にも新しい談話構造の研究が統合されてきた。聖書テキストを単に孤立した単語や文の集合ではなく、談話と呼ばれるより大きな結束性のある単位として分析する必要性は談話分析が解釈的モデルとしても有用であることが明らかだからである。

古典アルメニア語新約聖書においても談話的諸機能は新約ギリシア語におけると同じような戦略を用いて実現されていると期待される。アルメニア語新約聖書は新約ギリシア語本文の翻訳である以上、新約ギリシア語テキストで講じられている戦略を忠実に踏襲することが最適な翻訳作業に求められるものと予測されたが、実際にはそのようにはなっていない事例が数多く見られた。ルーおよびナイダ著『意味領域に基づいた新約聖書ギリシア語・英語辞典』(1988-1989)に搭載された「談話標識」と「談話指示関連語詞」という二つの意味領域に関して、語彙的な対応関係を比較分析してみると、アルメニア語にはギリシア語の談話機能に与る語詞と一対一に対応する語詞の数がきわめて少なく、したがってアルメニア人翻訳者の側に高次の談話戦略に関する深い知識と理解がなければ翻訳作業を適切に遂行することが困難であったと推論された。

古典アルメニア語における主な談話分析的な研究としてはウズニャンによる『古典アルメニア語における語りの話法』(1992)、ヴァイテンベルクによる『福音書モスクワ写本とエジュミアツィン写本における一・二人称冠詞との使用のテキスト年代的諸相』(1994)、クラインによる『古典アルメニア語における人称直示 古アルメニア語福音書のエジュミアツィン写本とモスクワ写本における指示詞の統語論と意味論の研究』(1996)が挙げ

られるが、最初のものは聖書だけでなく古典期著述家の原テキストをも対象としているが、動詞「言う」と結合する補文標識の有無に関するいわゆる直接・間接話法あるいは言述の研究であって、本研究がめざす談話分析の範囲には厳密には属さない。後の二つはアルメニア語に固有の定冠詞ないし指示詞を中心とした人称直示詞の使用による談話的機能に関するものである。アルメニア語の人称直示詞は談話的語詞の少なさを補うための整然とした体系性を備えており、品詞としても人称冠詞、形容詞、副詞などに横断していることから、「談話指示関連語詞」(たとえば話し手、聞き手、相互指示、関係指示、人称直示など)として談話的機能を果たす上できわめて有効な手段であったことは疑いない。しかし、聖書テキストに展開されるより高次の複雑多岐にわたる談話的機能を果たすにはこのような直示詞だけで十分であったとは到底言い難い。以上のことから、アルメニア語新約聖書の談話分析はより広範な談話分析に統合されるべき課題として理解される。

(2) これまでのところ人称直示詞を中心としたいわばミクロ構造(たとえば節、句、個々の単語のレベル)のボトムアップ的な研究の域を脱しておらず、テキストの構成・構造を支配する談話というより大きなマクロ構造を対象とするトップダウン的な研究が積極的に進められてきたとは言い難い。無論、マクロ構造はより小さなミクロ構造の連続からなっており、より大きな談話単位に焦点をあてるのがより小さな言語単位を精査する必要性を排除するものではない。たしかに語や節の分析は重要ではあるが、より大きな談話の展望の中においてはじめて有意義な役割を果たすものと言える。

このような観点から、アルメニア語の聖書テキストに対しても、とくに談話標識と考え

られる語詞を認定して、これらの語詞が談話というおおきな単位の構造にどのような機能を果たしているのか、そして談話構造が談話戦略にどのように寄与しているのかを解明する必要があった。ギリシア語新約聖書における談話構造の研究に比べれば、アルメニア語新約聖書における談話構造の研究はかなり遅れをとっている。したがって、最新の談話分析の理論と方法を参照しつつ、新約聖書ギリシア語の談話分析と比較分析することで、アルメニア語新約聖書の談話構造の実態が明らかにされることが期待された。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、古典アルメニア文語による新約聖書の翻訳テキストに見られる談話構造とその翻訳底本であるギリシア語新約聖書の談話構造を比較分析することによって、アルメニア語テキストでは人称直示詞という手段だけでなく、ギリシア語とは異なるどのような独自の戦略が模索されていたのかという課題を追求する。

(2) アルメニア語においては談話小辞あるいは結合辞がギリシア語のそれらにある程度対応することが可能であったが、アルメニア語聖書ではあえてギリシア語の小辞ないし結合辞を訳さないという存在している。統語論的・語彙論的なレベルで忠実な翻訳に努力を傾注しているアルメニア語翻訳者が、あえて翻訳しないというネガティブな選択をする行為は一種の異訳現象であり、本研究では、こうした異訳現象を重視して、アルメニア語新約聖書およびギリシア語新約聖書のテキスト比較に基づき、アルメニア語における談話戦略の実態を明らかにする。

(3) 最新の談話分析の理論と方法を取り入れつつ、新約聖書ギリシア語の統語論・意味論および翻訳学の成果に基づくギリシア語新約聖書の談話分析をも参照しながら、アル

メニア語新約聖書に特有な談話構造が認められるかを明らかにしようとするものであり、ひいては新約聖書における談話構造の一般理論の構築にも寄与する可能性を引き出そうとするものである。また、アルメニア人翻訳者がギリシア語とは異なる文法と語彙に依存しながら、談話という高次のレベルにおいてギリシア語原典と向き合い、聖書翻訳という普遍的な宗教的営為をどのように実現し得たかという問題の解明にも寄与することを目的としている。

## 3. 研究の方法

(1) 古典アルメニア語新約聖書の談話構造を分析するにあたって第一級の談話資料である「書簡」というテキスト・ジャンルに焦点を絞り、談話構造を構成する三つの主要なカテゴリーとその具体的な方略について、比較分析を進める。三つのカテゴリーとは談話境界、卓立、結束性である。

談話境界は談話の一単位が終わり新しい単位が始まる場所、談話内容が転換ないし移行する場所であり、具体的には文法的人称の転換や動詞時制形の転換が関与する。卓立は談話のいわば山場・クライマックスであり、具体的には動詞アスペクト、語順と節の構造、文法規則では通常不要な余剰的主語代名詞の使用が関わる。結束性は談話をひとまとまりにして結束させる文法的・意味的・文脈的諸要因であり、具体的には人称指示、動詞アスペクト、結合辞、情報構造が関与する。これらのカテゴリーのそれぞれについて「書簡」テキストを調査する。

アルメニア語「ゾフラブ」聖書テキスト(1805)から「書簡」テキストをすべてローマ字テキストに転写する。古典期アルメニア語における談話標識を把握するために、アウエティキャン他による『アルメニア語新辞典』

(1836-1837)とパランディアンによるその逆引き語彙索引(1991)、およびユングマンとヴァイテンベルクによる『古典アルメニア語逆引き分析辞典』(1993)を参照して、談話機能をもつと考えられる語詞すべてを抽出する。

新約聖書ギリシア語本文とアルメニア語テキスト「パウロ書簡」(「ローマ人への手紙」「コリント人への第一・第二の手紙」「ガラテヤ人への手紙」「フィリピ人への手紙」「テサロニケ人への第一の手紙」「フィレモンへの手紙」)、「パウロの名による書簡」(「コロサイ人への手紙」「エフェソ人への手紙」「テサロニケ人への第二の手紙」およびいわゆる「牧会書簡」「テモテへの第一・第二の手紙」と「テトスへの手紙」)、「共同書簡」(「ヘブル人への手紙」「ヤコブの手紙」「ペトロの第一・第二の手紙」「ユダの手紙」)を対照し、上記の三つのカテゴリーについて談話的レベルでの対応関係を同定する。とくに異訳および逸脱した対応、すなわち付加や省略、逐語訳とは言えない自由な訳あるいはあえて訳さない事例が見られる場合には、さらに諸種の聖書テキスト・注解書・コンコーダンス等を参照して、テキストの異本や欄外注の可能性の有無等を検証することにより、それがアルメニア語に固有の談話戦略であるのか、あるいはイラン語やシリア語などの外来因子が潜在しているのか否かに留意しながら作業を進める。

(2) 上記作業と同じく、現代アルメニア語新約聖書「パウロ書簡」「パウロの名による書簡」「共同書簡」に対してもローマ字テキスト転写を実施して、三つのカテゴリーについて古典アルメニア語新約聖書との類似点・相違点を調査する。これにより、アルメニア語談話戦略の古典期以後の歴史的変遷を跡づけることができるようにする。

(3) 上記作業に並行して、現代アルメニア語

の談話構造に関しては、書き言葉としての聖書テキストのみに偏ることがないように、アルメニア人母語話者から直接に話し言葉レベルでの情報を得るなどして、談話の共時態・通時態を統合した研究を進める。

#### 4. 研究成果

(1) 談話境界に関しては、節や文といった小さな単位は句読法や結合辞といった特定の境界標識をもつことに加えて、章節や段落といったより大きな単位の境界については多様な手段が講じられていることが明らかになった。文法的人称の転換が一つの談話単位を閉じて別の単位を開始することを示す有益な手段であった。アルメニア語ではギリシア語と同様に、人称の転換は境界標示の有効な手段であったが、さらに人称直示詞を加えたり、文法的には必要のない代名詞を補うことによって、境界標示を明確にしている事例が多数見られる。また、例えばアオリストから現在といった動詞時制形の転換も談話の語りの開始あるいは終了を示すうえで有用であったことが知られた。

卓立は談話のいわば山場であって、アルメニア語にはこれを示す言語的手段がいくつかある。動詞アスペクトの交替は談話の強調点あるいは山場を示す手段として用いられるが、ギリシア語では背景的時制であるアオリストにおかれる項目は物語では背骨部分、また解説では例証資料であり、前景的時制である現在形と表景的時制である完了形が卓立的特徴を標示するのに用いられる。アルメニア語はギリシア語と類似した現在・アオリスト・完了を所有しているので、ギリシア語における談話構造のアスペクト的差異を概ね保持しているように思われるが、必ずしも時制の呼応関係を維持していないアルメニア語に独自の特徴も見られた。語順に関しては、関係節の前置がギリシア語と同様に卓立

に与っていることが確認された。

以上の事柄は、先行研究では明瞭に指摘されてこなかった成果であり、今後のアルメニア語談話分析だけでなく、アルメニア語新約聖書研究にも貢献するものである。

(2) 談話を整合性のあるひとまとまりのものにする結束性は文法的・意味的・文脈的要因からなるが、とくに直接の呼びかけ、動詞の文法的人称、代名詞指示といった手段はギリシア語本文と概ね対応する形で踏襲されていることがわかった。動詞アスペクトに関しては、卓立の場合と同様に、ギリシア語におけるアスペクト交替の一定のパターンを保持している反面、自由にアスペクトを変換して談話の流れにアルメニア人翻訳者独自の解釈を加えている事例も多く認められた。また、談話に結束性を与える機能をもったさまざまな結合辞は、ギリシア語テキストと同様にアルメニア語テキストでも単独であるいは他の結合辞と組み合わせて頻繁に用いられており、結合辞の数自体も少ないゆえに、対応パターンはある程度決まっていたことが示された。

本研究で吟味された古典アルメニア語結合辞はギリシア語対応語とともに『古典アルメニア語辞典』で記述した。しかし、その一方で、ギリシア語テキストには欠如しているところに結合辞を補っている事例や、逆にギリシア語テキストの結合辞に対応する語詞を当てていない事例が多く見られたことから、こうした措置は、アルメニア人読者あるいは聴者に不自然な印象を与える恐れのある忠実な逐語訳をあえて避けることにより、語調を整えつつ談話の流れを阻害することなく、むしろ結束性をより高める効果を優先させることで、読者あるいは聴者の聖書理解を促進させようとした翻訳者の判断によるものであることを明らかにした。

同時に、アルメニア語聖書に散見されるギリシア語本文と異なる訳あるいは語順の変更も含めて、こうした広義・狭義の異訳現象はアルメニア語新約聖書翻訳者による独自の本文解釈を直接・間接に反映する証左として、従来のアルメニア語研究ではほとんど顧慮されることのなかったアルメニア語談話構造と談話戦略の解明に寄与する重要な事実であり、新約聖書解釈学にとどまらず翻訳学の発展にも貴重な示唆を与えるものと考えられる。

(3) アルメニア語談話戦略の通時的な側面を見るために、古典アルメニア語と現代アルメニア語の新約聖書書簡のうち、とくに「ローマ人への手紙」をモデル・テキストとして採用し、主に談話境界・卓立・結束性に関して調査した。談話境界を示す人称転換については古典期と概ね類似の対応が見られた。また、古典期とは異なる卓立にかかわる現象として、余剰の代名詞を繰り返して、文意を強調する事例が見られた。動詞アスペクトの交替については、動詞組織が形大砲との面でも古典語とは著しく異なっているゆえに単純な比較は難しいが、時制・アスペクト・叙法などにおいて複雑になっている現代アルメニア語テキストでは古典期に見られたギリシア語との対応よりも微妙な差異を利用することによって、談話戦略がより豊かにされていることを明らかにした。

こうした実態は、テキスト作成作業に協力したアルメニア人母語話者からの情報によっても確認された。その一方で、結束性に資する結合辞の使用は多様性に乏しく、古典期の結合辞による談話戦略とは異質の戦略が働いていることが示唆された。これらの通時的な比較分析は従来のアルメニア語学ないし談話分析においてはほとんどなされてこなかった事実であり、談話分析をも統合した新しいアルメニア語歴史言語学の発展に大

きく寄与するものと期待できる。

研究者番号：

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

千種真一、再建と類型論 印欧祖語をめぐって、日本歴史言語学会、2012年12月8日、千葉大学

〔図書〕(計1件)

千種真一、大学書林、古典アルメニア語辞典、2013、787

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千種 真一 (CHIGUSA Shinichi)  
東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30125611

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )